

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	① 乙 第 3918	号	氏 名	井 田 陽 介
論文審査担当者	主 査 内科学 日 比 紀 文			
	外科学 北 川 雄 光	臨床腫瘍学 矢 作 直 久		
	薬剤学 谷川原 祐 介			
学力確認担当者：	審査委員長：北川 雄光			
	試問日：平成25年 3月19日			
(論文審査の要旨)				
論文題名：検査完遂率向上を目指したカプセル内視鏡の低侵襲前処置法の検討				
<p>カプセル内視鏡の診断率向上には対象とする腸管を検査時間内に通過する必要があるが、カプセル内視鏡は腸管の蠕動により検査が進行する受動的な検査であるため完遂に関与する因子の解明および適切な前処置法の開発が期待されている。今回、当院の小腸カプセル内視鏡結果を解析し、モサプリド内服と胃通過時間45分未満が大腸到達に関与する独立した因子であり、モサプリド投与により胃・小腸通過時間が短縮して小腸カプセル内視鏡の大腸到達率が向上すると考えられた。さらに潰瘍性大腸炎患者に対する大腸カプセル内視鏡の新規前処置法を検討、腸管蠕動促進薬を併用した低服用量の前処置法として、メトクロプラミド10mgとPEG 2L、モサプリド20mgを2回服用する方法を考案した。その結果、検査完遂率は他報告と同程度であったが腸管洗浄度は不良であった。しかしながら炎症の判定には十分であり低侵襲な前処置法が可能であることが示唆された。</p> <p>審査では小腸カプセル内視鏡の解析結果について、胃通過時間とモサプリドが交絡因子となるのではないかとの質問がなされた。多変量解析で交絡因子は調整出来ていると考えられ、またモサプリドにより小腸通過時間が短縮することも大腸到達率に寄与していると考えられるので、独立した因子と考えるとの回答がなされたが、共分散分析により交絡の評価が可能であったのではとの指摘がなされた。また、モサプリドを選択した理由、投与方法について質問がなされた。モサプリドは副作用や禁忌が少なく安全性が高いこと、投与方法は薬剤の作用機序から今回の方法に至ったとの回答がなされた。</p> <p>大腸カプセル内視鏡の前処置法については、大腸内視鏡とカプセル内視鏡の結果の相関について、相関係数の値から相関があるとしてよいのかとの質問がなされた。大腸内視鏡画像の所見を熟練読影医が判定した場合でも同程度の結果であるため、問題ないと考えるとの回答がなされた。また腸管洗浄度について、大腸遠位側の方が良好である理由について質問がなされた。それに対し、遠位側については到達例のみの評価であり、洗浄度が不良であるものは遠位側まで到達していない可能性があること、また大腸内視鏡においても上行結腸は残渣が多く、洗浄度は腸管の部位に依存する可能性もあるとの回答がなされた。今後の前処置法の改善策について質問があり、今後は総服用量は変えずに服用時期や間隔を検討、大腸停滞例では下剤の追加投与などを検討しているとの回答がなされた。最後に、今回は中等度の活動度までの潰瘍性大腸炎患者に対し施行しているが、今後重症例への適応は可能かとの質問に対し、適応可能であり現在準備中であるとの回答がなされた。</p>				